

にいがた 平和スクール

被爆体験者講話版

被爆体験者講話

当時の状況

私たちは、被爆された朴南珠氏に話を聞いてきました。朴南珠氏が小学生の頃、日本は真珠湾攻撃に成功するなど毎日のように戦争を繰り返して、勝った負けたで人々の生活が左右されるような時代になっていました。

そんな中で朴氏を含め多くの市民は、食料や履物が配給制となり、より苦しい生活を強いられていました。さらに生活だけで命の危機を感じさせられる出来事も起こっていました。それは、空襲です。広島は空襲が29回、爆撃機が飛ぶことが多々あり、その度に、防空頭巾をかぶり、自分の命を守るために動いていました。しかし、不思議なことにB29は何度も到来しましたが、爆弾を1個も落とさず帰ってしまいました。これが、原爆投下に向けてのアメリカ側の作戦だったという事は、当時の広島市民たちには知る故も無かったのです。今の当たり前の当たり前ではない時代なのだと思います。

投下当日

8月6日、今までにないような青空が広がり、朝からとても暑かったと言います。6時30分頃、警報がなりました。しかし、町の人々は普段からB29が飛行

8月5～7日、広島での平和研修で中学生が学んできたことを新聞にまとめました。

- 【記者】
- 加藤 未奈
 - 小林 麗生
 - 乙川 今命
 - 中島隆之介
 - 平山 芽依
 - 丸山 心春

2019年
10月1日
新潟市総務部総務課



平和のために

この原爆を通して、朴さんは思い出すことも辛く、これまで語ったことも無かったことです。けれど、被爆者の高齢化が進んだこともあり、戦争を知らない現代の私達に戦争の残酷さを伝えてくださりました。講話を聞いて当時の情景などが少しづつ浮かんできました。「原爆を兵器として使ったのはいけない、絶対だめ」とおっしゃっていました。二度と同じような事を起こさぬよう、私達にもできることはあると思えます。優しい心、人に対する思いやりの心を忘れず、人が助け合いながら暮らしていくことが大切だと感じました。

今、日本が平和なのは「あの日」こういうことがあったからというのを絶対に忘れてはならないと朴さんは私達に伝えてくださいました。私達が思っているよりも悲惨で、言葉で言い表せない程の講話でした。この事を私達の世代はもちろん、来世に伝えていくことも必要です。被爆者の体験を無駄にしないように。



とうろう流し

僕は、8月6日に、とうろう流しに参加しました。静かな、穏やかな雰囲気の中、川には光る炎とそれに照らされる平和への願いがあり、とてもきれいでした。とうろう流しとは、昭和22年から23年頃から始まったと言われ、仲間や知人の死者の追悼と供養のために行われた行事で、自分の平和への願いを灯して、川に流すことです。その会場では、願いを書いた紙も流すまでの列も多くの平和を願う人であふれていました。その光景はとても美しく、多岐の人が「幸せな暮らし」を祈っていて、元安川はみんなの「幸せ」であふれていました。

原爆被害者の証言

証言レポート

8月6日(火)、「原爆被害者証言のつどい」に参加しました。新潟市の中学生がグループに分かれそれぞれ伺った証言をレポートします。

津島休映さんは、14歳のころ学徒動員で爆心地から2.5kmで被爆しました。津島さんは原爆が投下されたときのことについて話してくださいました。原爆が落とされた瞬間は、真正面からの熱い風を感じ、真っ暗でも見えなくなり立ち上がることもできなくなりました。しかし津島さんはその時、どれくらい爆風でどれくらい暗さだったのか覚えていないそうです。少し経つと、倒壊した家々から血を流した人々が出てきました。やっと歩きだしても水を求める人や、やけどのため皮が落ちてくるのを防ぐため腕をあげている人がいるなど悲惨な光景ばかりだったそうです。とくに水を求める人は「死んでもいいから水を飲ませてほしい」と。しかし火傷を負った人に水を飲ませてはいけなくて聞いていたので水をあげなかつたと言っていました。「水を飲まずに死んでしまうのなら水をいっぱい飲ませてあげればよかった。」と今でも後悔していると語ってくださいました。

証言レポート

その日の午後、雲一つない青かったはずの空から黒い雨が降ってきました。その黒い雨が放射能などを含んだ危険な雨だとは知らずに当時の人は浴びてしまったといえます。その黒い雨のせいで今でも病気で苦しんでいる方もいます。ですが津島さんはファッションセラピーなどに参加し笑顔絶えず生きていくことで、お会いした際とても元気そうでした。被爆直後から約75年も草木が生えないと言われていた広島で今、衣食住そろい幸せに生きていけることが喜びだと言っています。今、原爆の悲惨さが風化されることが恐れられています。私たちの世代が後世に伝えていくことが一番の恒久平和への近道だと考えます。

事業に参加しての感想

今回の事業に参加して、私は教科書や学校の授業だけでは学ぶことのできなかったことを知る事ができました。現地に行き、学んだこと、学んだこと、学んだことを学び、平和についてより深く考えることができて良かったです。これからも平和への関心を失わず、世の中を生きていきたいと思えます。

(加藤 未奈)

私は初めて広島へ行き、教科書や授業で原爆のことを勉強するより、悲惨な状況だったということが分かりました。二度とあのようなことを繰り返さないこと、絶対忘れてはいけないと強く思いました。世界中が平和になるように祈り続け、自分の命を大事にしたいです。

(小林 麗生)

この研修を通して、被爆者の語る地ごとくや平和記念公園に残された願いなどを感じて、原爆の恐ろしさを言葉にできないようなこわい形で頭に刻むことができました。被爆者の証言を聞く貴重な体験ができたので、この体験を忘れず自分が平和を発信したいと思えます。

(乙川 今命)

私がこの研修に参加して感じたことは、原爆の恐ろしさ、そして平和を訴えることの大切さです。そして、この学びを自分の中にとどめていくのではなく、どんな外に発信していくか、さらに自ら行動していきたいです。平和な社会の実現に向けて。

(中島 隆之介)

今回の事業に参加して、現地では分からないこともありました。さらに、貴重な証言も聞くことができました。悲しみのうねに築かれた平和な日本を守り抜き、だれもが納得できる平和を築きあげたいです。世界の恒久平和を願っています。

(平山 芽依)

被爆者の方から、お話しを聞いたことは、教科書や資料では伝わりきらない強い思いが分かり、貴重な経験になったと思います。今回、この事業に参加して感じられたこと、被爆者の強い願いを実現できるように私たちの身近な問題から理解し、解決していきたいです。

(丸山 心春)